



あなたは、自分の矛盾に気がついていきますか

大日本茶道学会長 田中仙堂さん 日本精工元社長の今里広記さんからの言葉



「世襲する立場で『跡を継ぎません』といえば立派なことなのか、必ずしもそうではないようにも思います」 東京都新宿区、篠田英美撮影

理念継ぎ 休まず考え続ける

大学生のころだった。父の田中仙翁が第四代会長を務める茶道の流派「大日本茶道学会」の初釜。ここで自分の存在自体を揺さぶられるような言葉を突きつけられた。

「あなたは、自分の矛盾に気がついていきますか」

発したのは、作家の井上靖が連れてきた日本精工の今里広記・元社長だった。「財界幹事長」の異名もつた傑物だ。「その時は『はあ、そうでしょうか』と気づかないふりであり過ぎてしまいましたが、内心、『言われてしまった』と痛かったです」

同会は、茶道改革運動を標榜した田中仙翁が1898年に創設した。仙翁は世襲家元制度の否定を公言した時期もあった。「跡継ぎとして扱われているのを『当然と受けとめていいのか』と迫ったのでしよう」

6歳から茶道の稽古にいそしみ、自らやるべきものという意識も育っていた。中学3年のころから、実存主義の思想に目覚めた。大学、大学院では社会学を学んだ。「会を続ける価値はあると思っていたのですが、のほほんと継承するのは何か違う。仙翁の考えに矛盾しないか、という思いは強まっていった」

痛い言葉との向き合いは、絶え間なく続いた。点前を公開し、茶道を特定者の秘術ではなく、再現できる

学術として研究し続けるスタンスも、明確に意識するようになった。財団法人から公益財団法人への移行時、仙翁の理念を「ミッションステートメントおよび行動指針」として2011年に明文化した。「流儀を超えた茶道文化の普及」「誠意」「茶道精神で力を合わせる」「笑顔」「挑戦」など、常に立ち返るべき指標が列挙されている。「世襲として地位を継ぐのではなく、理念を継ぐ。この憲章にもとっていかないか、自ら厳に律するものにした」

昨年、第五代会長になった。父はそれを見届けるように逝去。頼むのはおのれ一人だ。「社会は矛盾した原理に満ちていて、自分は間違ったところにいるのではないか」という考えに向き合っていくしかない。矛盾の中で人は迷う。悩む。

「ゲーテの『ファウスト』にもありますが、人は努力する限り迷う。何が最適なのか、今も日々迷い続けています。考えることを休んではいけないと思います」 (米原龍彦)

1958年、東京都生まれ。大日本茶道学会第四代会長の田中仙翁さんの長男。東京大大学院博士課程(社会学)単位取得。同会副会長を経て、昨年第五代会長に。著書に「岡倉天心『茶の本』をよむ」など。

■ 情報・ご意見はファクス(03・3541・0661) またはメールで(yukan-toukou@asahi.com)